ヒヨリミ菌

渡辺鵜禾（わたなべひよか）

僕はヒヨリミ菌。

善玉菌が優勢だと善玉菌に加勢し、悪玉菌が優勢だと悪玉菌に味方するのが僕。

君に正義はないのか！　と言われそうだけど、生きのびるのが僕にとっての正義。ヒヨリミ菌が、一番長生きしている菌だ。

近頃、新型コロナウイルスが発生していると、毎日ニュースで言っているのを聞いて、心配している。

新型コロナウイルスは、僕たちヒヨリミ菌を殺すんだろうか、それとも無視してくれるのか、または、加勢を求めてくるのか。宿主の人間が死ねば僕たちも死ぬので、宿主を殺すようなウイルスとは手を組めない。

僕の宿主は、ミニコミ誌の女性編集者で、二十八歳。今はイベントも集会も禁止されてしまい、会社の存続さえあぶない状態。

会社がこうなる前に彼女は結婚サギにあった。友人が結婚していくので、早く結婚を！と思うあまり、金を持っていそうな男にダマされてしまったのだ。

彼女はコツコツと貯めていたお金をサギ師に手渡してしまい、そのうえ、会社まで倒産してしまえば、家賃、光熱費さえ支払えなくなってしまう。

僕の声が彼女に届いていたら、

「よせよ、そいつは結婚サギだ！」

と注意していたものを、どうして金持ちの男になびくんだろう。

相手の男は、コーヒー茶わんや、紅茶茶わんを扱っている貿易会社の社長で、今までは売り上げも良かったんだろうが、新型コロナウイルスの影響で打撃を受けたのだろう。結婚しているのに独身とウソをつき、彼女に、三百万円用立てて欲しいと言ってきた。一週間後に返すからと。

彼女はなんの疑いも持たず、銀行でお金をおろすときも、銀行員の注意の言葉も聞き流し、なんの約束もかわさずに貸してしまった。

一週間もしないうちに、ケータイは一切つながらなくなり、返す約束の日になっても連絡はなかった。心配になった宿主の彼女が男の会社に行くと、シャッターが閉まっていた。

「倒産しました」と書かれた紙が貼られてあり、多勢の男性たちが怒鳴っていた。

彼女はボーゼンとしていた。自殺するんじゃないかと、僕は心配になった。彼女が死ねば、僕も死ぬのだから、それだけはやめて欲しいと願った。

彼女がフラフラと帰宅する途中、子猫の鳴き声が聞こえた。彼女が見おろすと、シマ模様のオスの子猫だった。彼女が子猫を抱きあげると、体内のミトコンドリアがムクムクと活気づき、僕たちにまで栄養分を送ってくれた。人間界でいえばボーナスだ。

あまりの突然のことに、ヒヨリミ菌のほか、善玉菌、悪玉菌までも喜び、細胞たちは活気づいた。彼女が猫を可愛がるたびに、僕たちにはミトコンドリアからボーナスが支給されるようになった。

しかし、ボーナスが毎日支給されるようになると、今度はあまり活気づかなくなった。支給されて当たり前と思うようになってしまったからだ。

子猫は日増しに成長し、彼女のベッドにもぐり込んだり、時には部屋を汚したりもしたが、彼女は子猫の世話をすることで、傷ついた心をいやしていたと思う。

もし、子猫と出会っていなければ、彼女は自殺していたかもしれなかった。

出会うタイミングって大事だと思う。彼女にはこれで良い経験が積めたと思ってほしい。

『もう、恋なんかしないわ。仕事は私を裏切らないもの！』

彼女は心の中で叫んでいた。

「男を見る目を養いなよ」

僕は彼女にそう言ってやりたい。

今まで彼女が好きになる男は、話にもならない奴ばかり。

結婚サギ師なんて最悪な野郎だというのに、彼女が奴とデートをしたことを思い出すと、トキメキを感じて、ミトコンドリアが僕にボーナスを支給してくれる。なんだか複雑な気持ちだ。

新型コロナウイルスに対抗する方法があるとすれば、それはミトコンドリアを活性化させることだと僕は思う。

ミトコンドリアが、ボーナスをくれるのは、いつも彼女が愛情やトキメキを感じたときだった。

愛とかトキメキを感じると、ミトコンドリアが喜び、体内の細胞にボーナスを送るから、新型コロナウイルスにかかっても、逆にやっつけてしまえるかも知れない。

宿主に、愛とトキメキを常に感じてもらえれば、僕にボーナスが支給されるのだ。なんと喜ばしいことだろう。子猫が、僕にとっても大切な存在になっている。

脳内にも、愛や恋のセンサーを、もっと敏感に感じとるように指示を送っておこう。

愛とトキメキが、新型コロナウイルスをやっつけられるのだ。

愛は、最強だ!!